百人一首の愉しみかた

西川　恭治
全日本かるた協会8段

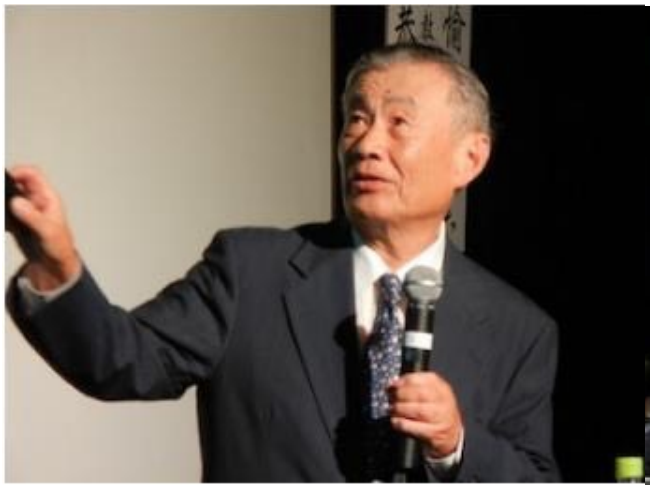
＜はじめに＞

　みなさん、こんにちは、西川と申します。

　本日は、皆さんに、「百人一首の愉しみかた」という題でお話をさせていただきます。最初にお断りしておきますが、私は、日本文化の専門家ではありません。私の専門は、物理学でありまして、日本文化とは何の関係もないものです。それなのになぜ私がこういう題でお話をするかと言いますと、それは、私が小倉百人一首かるた遊びの達人だからです。

　まず、今日の話の内容ですが、最初に、小倉百人一首について、いくつかの和歌を選んで、お話をし、途中クイズを交えて、皆さんと交流しながら、話を進めて行きたいと思いますので、よろしくご協力をお願いいたします。

　次に、かるた遊びの簡単な歴史、そして、私が嗜んでおります「競技かるた」のルールについてご説明します。その上で、ビデオで、8年前のクイーン戦の模様の一部をお見せします。このクイーン戦は、それまで11年間にわたってクイーンの座を守り続けてきた史上最強のクイーンと言われた渡辺令恵永世クイーンに若手の斉藤裕理6段が挑戦した歴史的な試合です。ご覧になっていただければお分かりになると思いますが、競技かるたは、日本古来の文化を使ったユニークな激しい室内スポーツで、高度のテクニックと訓練を必要とします。特に、記憶力・集中力・瞬発力・注意力を要し、またその訓練を通じてそれらを磨くことができます。そこで、この競技かるたの達人になるために必要な訓練について、基本的なことをお話し、競技かるたの奥義にも触れてみたいと思います。その上で、再び先程のクイーン戦の劇的な顛末について、ビデオをお見せします。最後に、時間がありましたら、私と競技かるたについて簡単にお話しさせていただくことにいたします。



2011年10月18日　TSS文化大学で講演する筆者

＜小倉百人一首について＞

小倉百人一首は、鎌倉時代の著名な歌人である藤原定家が、それまでの勅撰和歌集――勅撰和歌集というのは、天皇の命で、その時代の優れた和歌を集めて歌集にしたもので、古今和歌集、新古今和歌集、等はよくご存じの通りです。――その勅撰和歌集に掲載されている和歌の中から、百人の著名な歌人を選び、その一人一人について一首ずつ代表的な和歌を選んで、京都嵐山嵯峨野の小倉山荘という所の襖に記したものと言われています。そこで最初のクイズです。

[クイズ1]：小倉百人一首が選ばれたのは、何世紀でしょうか？
答えは、1235年で13世紀です。
選ばれた百人の歌人は、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての天皇、天皇家の人々、藤原氏などの貴族階級、僧侶などで、百首の構成は、誠に多彩でありますが、大きく分けて、自然の四季を歌った歌が４５首、恋歌が３８首、その他が１７首です。

[クイズ2]：さて、四季の歌では、春、夏、秋、冬のいずれの季節の歌が一番多く詠まれているでしょうか？
答えは、秋の歌で、春の歌が9首、夏の歌が4首、秋の歌が23首、冬の歌が9首、合計45首です。特に、秋のもみじの美しさを題材にした歌が多く詠まれています。

それでは、これから小倉百人一首に選ばれている和歌について、2, 3の例を選んでお話ししてみましょう。
まず春の歌として、平安美人として著名な小野小町の歌
花の色は　移りにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに
を選びました。この歌は、「桜の花の色はすっかり色あせてしまったなあ。この長雨の降っている間に。私の姿も衰えてしまったのだなあ。むなしくもの思いにふけっている間に」という意味です。「ふる」には、「世にふる」「月日を過ごす」と「雨が降る」の二つの意味があり、また、「ながめせしまに」には、「長雨が降る」と「もの思いにふける」という二つの意味があります。こういうのを掛詞と言います。
次に、秋の歌の例として、藤原良経（後京極摂政前太政大臣）の歌
きりぎりす　鳴くや霜夜の　さむしろに　ころもかたしき　ひとりかもねん
を選んでみました。この歌は、作者が妻に先立たれた直後に歌ったさびしい歌です。きりぎりすというのはコオロギのことで、「コオロギが鳴いているなあ。こんな霜の降りた寒い夜、私はむしろの上に着物の片方の袖を敷いて一人さびしく寝るのでしょうか」という意味です。平安時代、女性と男性が一緒に寝るときには、お互いの着物の袖を枕にして寄り添うて寝ていたということです。この歌では、連れ合いに先立たれ、自分の袖を敷いて独りで寝るという寂しい気持ちを歌っています。
次に恋歌では、沢山の男性と恋愛をしたという右近という女性の歌
わすらるる　身をば思はず　誓ひてし　人の命の　惜しくもあるかな
をまず選びました。右近は、美男子でまた琵琶の名手としても著名な藤原敦忠という人と長い契を交わしたのですが、その敦忠は、やがて別の女の所に行ってしまいます。その時詠んだ歌で、「忘れられていく私の身を辛いとは思いませんが、いつまでも愛してくださると神に誓ったあなたが天罰を受けて命をなくされてしまうことが心配です」という意味で、女の一途の愛を表したしおらしい歌ですが、反面、裏の意味として、自分を見捨てた男に対して、「私を裏切るなんて天罰が当たって死んでしまえ」という意味が込められているとも言われています。実際、相手の敦忠

は３８歳の若さで早死にしています。
　もう一首は、右大将道綱の母の歌
　なげきつつ　ひとりぬる夜の　明くる間は　いかに久しき　ものとかは知る
この作者は、蜻蛉日記という日記を残していて、そこにこの歌に関することが書かれているそうです。平安時代の貴族の間の男女関係というのは、女性は自分の館で男性の来るのを待ち受け、男性が女性のもとへ夜になると通うというのが習慣でした。恋愛中はもとより、結婚してからもそうでした。子供ができると、子育ては女性側の家族が行い、男性は夜通ってきたときに贈り物や生活費などを届けたといいます。しかし、訪ねてこなくなると、それも途絶えてしまい、女性の家はだんだん貧しくなるというのが実情だったそうです。女性は、浮気をされても我慢して待つしかなかったといいます。この作者は、藤原兼家と結婚しますが、兼家には何人もの恋人がいました。やがて、めったに作者の所へは来なくなりました。ある日、久しぶりに兼家が訪ねてきたがそそくさと帰ったので、後をつけさせたら愛人の所に行って泊って行った。その2,3日後の明け方、また訪ねてきたが、作者は門を開けずにいたら、また愛人のもとへ行ってしまったというのです。それを知って、翌朝、色あせた白い菊の花を添えて送ったのがこの歌だということです。「あなたが来ないのを嘆き悲しみながら、1人で寝る夜が明けるまでの時間が、どんなに長く感じられるかご存じでしょうか。いいえ、ご存じないでしょうね。」という意味です。
　最後に選んだ歌は、小式部内侍の有名な歌
　大江山　いく野の道の　遠ければ　まだふみも見ず　天橋立
です。小式部内侍は、女流歌人として著名だった和泉式部の娘で、小さい時からあまりにも歌が上手だったので、母が代作をしているのではないかと周囲から疑われていました。ある時、母が再婚相手の藤原保昌について丹後の国に行っているとき、宮中の歌合せに招かれました。そこで、小式部内侍に、多芸な歌人として有名な藤原定頼が「歌はどうするの？お母さんのいる丹後の国にお使いを出されましたか？」とからかったら、この歌を返したそうです。「大江山を越えて、生野を通る丹後の国への道は遠すぎて、まだ天橋立の地を踏んだこともありませんし、母からの手紙も見ていません。」これに、定頼は返す歌も作れなかったということです。生野というのは今の福知山の辺りの地名で、「行く」をかけ、踏みと文をかけています。
　ところで、小倉百人一首に選ばれた叙景歌の中には、実際の光景を見て写実的に作られたもののほかに、実際の光景を見ずに、ある光景を想像しながら作った歌がいくつかあります。そこでまたクイズです。

[クイズ3]：ここに記された7つの歌の中に実際の光景を見ずに歌ったものが２首ありますが、それはどれとどれでしょうか？
　①　むらさめの露もまだ干ぬまきの葉に きり立ちのぼる秋の夕暮れ　(寂蓮法師)
　②　春過ぎて夏来にけらし白妙の 衣ほすてふ天の香具山　(持統天皇)
　③　ちはやぶる神代も聞かず龍田川 からくれないに水くくるとは　(在原業平)
　④　あらしふく三室の山のもみじ葉は 龍田の川のにしきなりけり　(能因法師)
　⑤　しらつゆに風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける　(文屋朝康)
　⑥　山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬもみじなりけり　(春道列樹)
　⑦　ゆふされば門田の稲葉おとづれて あしのまろやに秋風ぞ吹く　(大納言徑信)
　答えは③と④です。
　③ は、業平が、東宮に仕える元の恋人である藤原高子に招かれ、龍田川のもみじを屏風に描いた絵について歌を詠むよう頼まれて詠んだもので、④ は、能因法師が、宮中で行われた内裏歌合せで詠んだものです。

百人一首の中には、男性が女性の気持ちになって詠んだ歌が３首あります。
[クイズ４]　次の歌の中に、男性が女性の気持ちになって詠んだ歌が２首あります。どれとどれでしょう？
①　いにしへの奈良の都の八重ざくら　けふ九重ににほひぬるかな
②　よもすがらもの思ふころは明けやらで　ねやのひまさへつれなかりけり
③　めりあひて見しやそれともわかぬ間に　雲がくれにし夜半の月かな
④　住の江の岸による波よるさへや　夢のかよひ路人めよくらむ
答えは②と④です。

＜かるた遊びの歴史＞
それでは、次に「かるた遊びの歴史」について簡単にお話しします。
小倉百人一首は、当初、貴族階級の間で貝覆い遊びなどに使われていました。それがどういうものなのかよく存じませんので、省略させていただきます。室町時代に、西欧からトランプなどのカードゲームが入ってきて、それに影響されて日本独自の小倉百人一首を使ったカードゲームが始まったということです。江戸末期になると、庶民の間で、小倉百人一首を使ったかるた遊びが広がりました。ここでは、読み札としての百枚と、取り札として下の句だけ書いた百枚が作られ、取り札100枚を土間や畳の上に並べて、それをみんなで取り囲んで、読み手が1人読み札を順に読み、それに対応する取り札を探して取りあうという、今のちらし取りにあたる遊びがはやったという話です。明治になると、小倉百人一首かるた遊びが各家庭での正月遊びの定番として定着してきました。その遊び方として、代表的なものが、源平戦、ちらし取りと坊主めくり、だったようです。私が子供のころは、毎年家族や近所の人全員で小倉百人一首でそういう遊びをしました。
そして、明治中頃になると、かるたの早取り法が工夫され、その早取り大会が主として学生の間で行われるようになりました。なかでも、東京帝国大学医学部では、学生やOBの間で、緑倶楽部や弥生倶楽部などのかるたクラブが作られ、盛んに早取り合戦が行われたようです。早稲田や慶応でも、また東京以外の土地でも、同じようなクラブができて早取り大会が行われたということです。
そういう中で、当時萬朝報という新聞社の社長であった黒岩涙香が、それならかるた早取り日本一を決める大会をやろうと考えました。しかしそれには、統一した競技ルールが必要です。そのルールが明治３７年に黒岩涙香により提案され、競技かるたが始まりました。そのルールは今でもあまり変わらない形で使われています。こうして明治３７年東京かるた大会が行われ、全国から１００人を超える選手が参加しました。以後、全国各地で似たような大会が行われ、昭和９年には大日本かるた協会が作られましたが、折しも日本は戦時下に入り、国から愛国百人一首が奨励され、小倉百人一首は使われなくなりました。戦後、復活した小倉百人一首は、戦前の達人たちを中心に、各地でかるた大会が行われるようになり、昭和３０年には、全日本かるた協会が設立され、翌３１年には、第１回名人戦が行われました。これは、東京を中心とする東日本のチャンピオンと京都・大阪を中心とする西日本のチャンピオンが対戦して、真の日本一を決める競技です。以後、名人戦は毎年開かれ、今日まで続いています。
名人戦を頂点として、全国各地で様々な大会が行われ、全国的に選手層を中心にした新しい組織作りが始まり、各県で各地に散在していた愛好会を一本化して、県かるた協会が設立されるようになりました。広島県でも、広島市を中心とした「ひろしま百人一首の会」、福山・尾道の美山会、因島の「みよしの会」、広島の学生かるた連盟、高校かるた連盟がまとまって、広島県かるた協会が、平成６年に設立されました。県かるた協会がほぼ全国に設立されたのを受けて、平

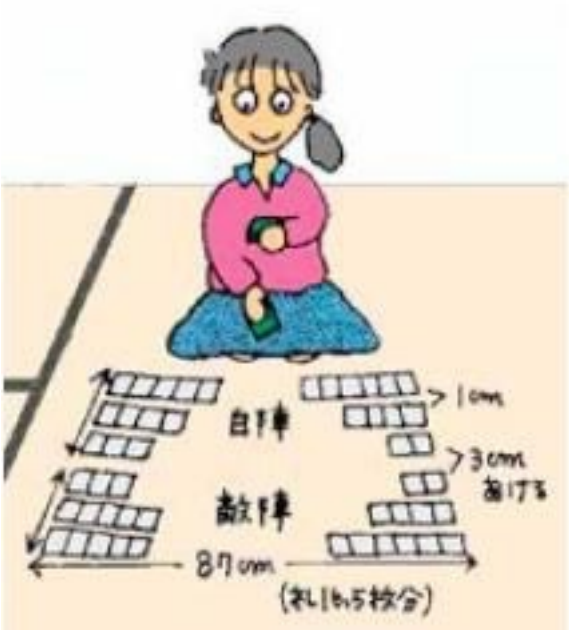
成９年には、それらをまとめる形で、社団法人全日本かるた協会が創設されました。現在、全日本かるた協会に登録されている有段者の数はおよそ２０００名、そのうち広島県かるた協会会員はおよそ４０名です。実際の競技かるた人口はその１０倍以上になります。

競技かるたのルール

それでは、ここで競技かるたのルールについて簡単に説明しましょう。

競技かるたは個人戦で、１人対１人で対戦します。まず、１００枚の取り札を裏向けにしてよくかき混ぜ、そこから無作為に1人２５枚ずつを取ります。それが対戦者の持ち札となります。2人で５０枚ですから、５０枚余ります。それは使用せず、空札となります。

持ち札２５枚は、右図のように、自分の方を向けて自分の前に横幅８７センチ、縦３段（相手に近い方から、上段・中段・下段と呼びます。）に並べます。ただし、どの札をどこに並べるかは、各人の自由です。



相手も同じように横幅８７センチ縦３段に並べます。自陣と相手陣の上段同士の間には、３cmの間隔を空けます。

並べ終わったら１５分間の暗記時間に入ります。この間に自陣・相手陣の合わせて５０枚の札１枚１枚について、どの札がどこにあるかをしっかり覚えます。

１５分たつといよいよ競技開始ですが、まず相手と読み手に手をしっかりついて「よろしくお願いします」と礼をします。これで読みが始まりますが、最初は1枚、百人一首とは関係のない歌が読まれます。これは序歌と言って、全日本かるた協会では、「難波津に咲くやこの花冬ごもり 今を春べと咲くやこの花」を使用しています。この序歌に限り、上の句から下の句まで通して１回読み、もう一度下の句を読みます。そして１秒あけて、１首目の上の句だけが読まれます。読まれた札 (読まれた歌の下の句が書いてある札で「出札」と言います) が場にあれば、先にその札に手を触れた方の取りになります。手というのは、各人右手か左手かどちらかに決めておき、両手を使うことは禁じられています。実際には、読まれた札に直接触らず、その手前の札から札押しで陣地の外に完全にはじき出してしまえばそれも取りになります。この場合、読まれた札以外の札に触っていますが、それはお手つきにはなりません。ビデオを見て頂ければわかりますが、達人同士の試合の場合、読まれるとほとんど同時に両者の手が出札を払い飛ばします。そのときは、出札により近い方から飛ばした方の取りになります。どちらがより近くかというのは、対戦者が一番よく分かりますので、大抵 2人

の話し合いで決まります。どうしても折り合いがつかない時は、審判に判定を仰ぎます。

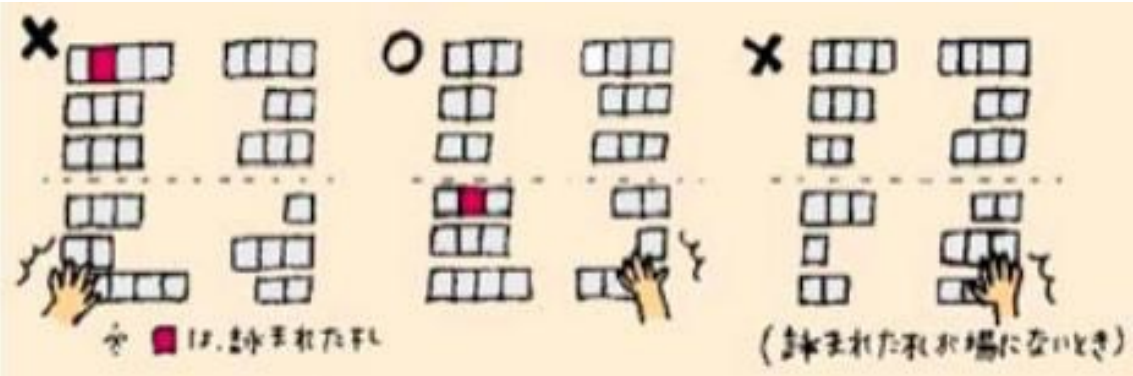
自陣の札を取ったときは、そのままで自陣の札が１枚減ります。敵陣の札を取ったときは、自陣の札から任意に１枚相手に送ることができますので、やはり自陣札が１枚減ります。

ところで、場にある札は５０枚ですが、読まれるのは１００枚全部ですから、残りの５０枚は空札になります。空札は取ってはならない札です。

札を飛ばしたときは、その辺の札が飛ばされてしまいますが、飛ばした人がそれを集めてきて、飛ばす前の状態にきちんと戻します。この札の整理をしている間は、手をあげて読みを待ってもらいます。札の整理が終わると、次の歌が読まれます。この時、読み手はすぐ前に読んだ歌の下の句を読み、１秒あけて、次の歌の上の句だけを読みます。

こうしてゲームは進み、次第に場にある札が少なくなっていきます。そして、先に自陣の札がなくなった方が勝ちになり、その時点でゲームは終了します。終了時も、開始時のように、相手と読み手に「ありがとうございました」と礼をします。

次にお手付きについて説明します。お手付きとは、読まれた札がない陣地の札に手が触ってしまった時で、たとえば、下図左のように出札が敵陣にあるのに、自陣の札に手を触れた時や、自陣に出札があるのに、相手陣の札に触れた時です。出札と遠く離れたところに手が触れても、その同じ陣地内に出札があれば、自陣であれ、相手陣であれ、お手付きにはなりません（下図真ん中）。空札が読まれた時には、どの札に手が触れてもお手付きです (下図右)。極端な場合、空札で、自陣と相手陣の両方の札に手が触れると、一度に２回お手付きをしたことになります。



相手がお手付きをしたら、自陣から札を１枚送ることができ、逆に自分がお手付きをしたら、相手から１枚札を送られます。そのため、お手付きをした側は１枚札が増え、された方は１枚減りますから、お手付きをすると、一度に２枚差がつきます。

一通り競技かるたのルールをご説明したので、ここで、ビデオで８年前のクイーン戦の模様をお見せしましょう。当時のクイーンは、渡辺永世クイーンで、すでに11年にわたりクイーン位を守っ

てきている名選手です。対する挑戦者の斉藤６段は、小学生名人から始めて、大学を卒業して間もない新進気鋭の伸び盛りの選手です。

ビデオ(6分)

＜競技かるたの達人になるには＞

それでは、これから競技かるたの達人になるための方法について、要点をご説明しましょう。達人になるためには、次の四つのポイントが大切です。

・札を覚える（記憶力）
・早く取る（瞬発力）
・お手付きをしない（注意力）
・終盤の詰め（集中力）

まず、**札を覚える**（記憶力）ですが、当然のことながら、１００枚の取り札を見てその上の句がすぐ分かるようにすることが必要です。それには、読み札を使って覚えるのではなく、**取り札**を使うことをお勧めします。取り札は、読むのではなく、**見る、馴染む**のです。取り札の中には、途中まで同じでよく似た札もありますが、それを読まずに、全体を絵として馴染むと、間違えなくなります。また、上の句を覚えるといっても、全部覚える必要はなく、大切なのは、上の句をどこまで聞いたら取り札を特定できるか、です。これを**決まり字**と言います。

そこで次に**早取り法**について説明しましょう。これからは、決まり字だけを使います。早く取るには、読まれた札を早く見つけて取らねばなりません。そのために、決まり字ごとに、自陣での取り札の置く場所を決めておきます。これを**定位置**と言います。取り札はいつもその定位置に並べます。そして何度も練習すると、上の句が詠まれたら、自然にその定位置に手が行くようになります。定位置を決めるには、**決まり字の速さ**が大切な要素となります。

まず上の句の１音目だけで決まる札が７枚あります。これを1字決まりと言い、**むすめふさほせ**、と覚えます。例えば、むと言われたら、その札は「きりたちのぼるあきのゆふぐれ」に決まります。以下同じです。第１音が同じ札が他にないという意味で、**１枚札**といい、1音目を聞いただけで取れるので、**1字決まり**です。

一枚札（最初から1字決まり）：

むらさめの　つゆもまだひぬ　まきのはに　きりたちのぼる　あきのゆふぐれ
すみのえの　きしによるなみ　よるさへや　ゆめのかよひぢ　ひとめよくらむ
めぐりあひて　みしやそれとも　わかぬまに　くもがくれにし　よはのつきかな
ふくからに　あきのくさきの　しをるれば　むべやまかぜを　あらしといふらむ
さびしさに　やどをたちいでて　ながむれば　いづこもおなじ　あきのゆふぐれ
ほととぎす　なきつるかたを　ながむれば　ただありあけの　つきぞのこれる
せをはやみ　いわにせかるる　たきがわの　われてもすゑに　あはんとぞおもふ

次は、**２字決まり**で、４２枚もありますが、その中でも、**２枚札**、つまり第１音が同じ札が２枚だけある札です。ここにある、**うつしもゆ**　がそれです。この場合、決まり字は第２音目になりますから、**２字決まり**です。

２枚札 (最初は２字決まり)

うかりける：　はげしかれとは　　いのらぬものを
うらみわび：こひにくちなむ　　なこそをしけれ
つきみれば：わがみひとつの　　あきにはあらねど
つくばねの：こひぞつもりて　　ふちとなりぬる
しのぶれど：ものやおもふと　　ひとのとふまで
しらつゆに：つらぬきとめぬ　　たまぞちりける
ももしきや：なほあまりある　　むかしなりけり
もろともに：はなよりほかに　　しるひともなし
ゆふされば：あしのまろやに　　あきかぜぞふく
ゆらのとを：ゆくへもしらぬ　　こひのみちかな

次に決まりの遅い札をあげましょう、一番長くまで決まらない札は、**大山札**と言って、**６字決まり**で３組６枚あります。

大山札

あさぼらけ　ありあけのつきを　みるまでに　　よしののさとに　ふれるしらゆき
あさぼらけ　うぢのかはぎり　たえだえに　　あらはれわたる　せぜのあじろぎ
きみがため　をしからざりし　いのちさへ　　ながくもがなと　おもひけるかな
きみがため　はるののにいでて　わかなつむ　　わがころもでに　ゆきはふりつつ
わたのはら　こぎいでてみれば　ひさかたの　　くもゐにまがふ　おきつしらなみ
わたのはら　やそしまかけて　こぎいでぬと　　ひとにはつげよ　あまのつりぶね

以上の他、**３字決まり**が３７枚、**４字決まり**が６枚、**５字決まり**が２枚あります。これが、１００枚の札の決まり字です。

ところで、決まり字というのは、試合が始まると、変化してゆきます。というのは、一度読まれた札は２度と読まれないからです。そこで、例えば２枚札の**うかりける**、と　**うらみわび**　ですと、最初はどちらも２字決まりですが、このうちの一方が読まれると、残りは　**う**　でとれるようになります。つまり１字決まりになるのです。同じような例として、大山札の　**あさぼらけあ**、**あさぼらけう**　は、一方が読まれると、残りは　**あさぼ**　で取れるようになります。まだ、３字決まりの　**あさじ**うの　という札がありますから、３字決まりですが、さらにこのうちのどちらかが読まれると、残った札は　**あさ**　で取れるようになります。そして、**あ**　の音で始まる歌は、全部で１６枚ありますが、そのうちの１５枚が読まれた後は、残りの１枚は　**あ**　で取れる1字決まりとなります。このような**決まりの変化**も含めて、取り札の上の句の決まり字までをしっかり覚えておくのが大切なのです。これには、相当の訓練と練習の積み上げが必要です。

さらに大事なことは、**札の位置**を正確に覚えておき、読まれたらすばやく**一直線でそれを跳ねる**ことです。競技かるたのルールのところで説明したように、達人同士の試合では、読まれるとすぐに両者の手が出札に向かって飛んできます。そしてほとんど同時に出札を弾き飛ばします。その時どちらが取ったことになるかというと、出札のより近くから飛ばした人の取りになりますから、札の位置を正確に覚えることが大切なのです。

さて、どんなに早く取っても、**お手付き**をすると持ち札は増えてしまいます。お手付きを減らすには、特殊な注意力が必要です。例えば、**友札**に注意すること、友札というのは、途中まで同じ音の札で、例えば、**うか**　と　**うら**　は友札です。また、先程挑戦者がお手付きをした　**わすれ**じの　と　**わすら**るる　も友札です。この場合、**わす**　までが同じで、そのつぎの「ら」か「れ」

かを聞き分けないといけないのですが、どちらもラ行の音で、聞き分けが難しく、お手付きをしたのです。

次に、相手に送った札や送られた札には注意する必要があります。特に、相手に送った札は、その札を送った後に読まれた時に、つい最初の送る前の位置に手が行ってしまい、お手付きをしやすいのです。だから「**送った札は一度は責めろ**」という格言があります。

概して、守りに入るとお手付きをしやすいものです。守って早く取ろうと焦るばかりに、つい自陣にお手付きをしてしまうのです。お手付きの７割以上は自陣札に触れてのお手付きです。ですから、**攻めかるた**に徹することが奨励されます。

お手付きをすると、相手が１枚減り、自陣が１枚増えるので、１度に２枚差がつきますから、お手付きは最小限に留めるようにしなければなりません。

◎お手付きをしない（注意力）

・**友札**に注意

友札：途中まで同じ音の歌（2枚札など）

うか、**うら**、　**わすれ**じの、**わすら**るる、など

送り札で、自陣と相手陣に分けるようにする。

相手陣の方を責め、自陣札は返り手でとる。

・**送った札、送られた札**に注意

相手に送った札は、一度はねらって**責める。**

・**責め**かるたに徹する

お手付きは自陣札に多い。

守ると、ついお手付きをする。

お手付きをすると、1度に**2枚差**がつく。

こうして、試合が進むにつれて、残った札の数が減り、またその残り札の決まりが短くなります。そして、**終盤**になると、ほとんどの札が1字決まりか2字決まりになります。つまり、1音目か2音目で感じて取らなければならなくなるので、終盤はスピード勝負となります。それには、大変な**集中力**が必要になります。

そして、最後にどちらも1枚同志になったときには、攻めても相手の守る札は取れませんから、守りに徹します。

◎終盤の詰め（集中力）

・**終盤は短い決まり（1字決まり、2字決まり）が多い。**
・**終盤はスピードが勝負。狙いを定めて早く取る。**
・**最後は、責めより守りきる。**
・**最後の1枚を取ったらそれを送り、礼をして終わる。**

それでは、これから、先程のクイーン戦のビデオの後半の部分を最後まで見て頂きます。先程の場面から大分試合は進行していて、永世クイーンが、ベテランの味を活かして、リードしています。挑戦者も、早い反応で、良く取っているのですが、お手付きにより、この段階で7枚リードされています。これから挑戦者の巻き返しが行われます。最後の終盤での迫力ある熱戦をご覧ください。

ビデオ(２６分)

＜私と競技かるた＞

私は、昭和 9年 2月の生まれで、5歳の時に家での正月遊びに仲間入りさせてもらい小倉百人一首に初めて触れました。12歳の時、疎開から帰ってきて、アパート住まいの時、アパートに競技かるたの達人がいて、教えてもらって100枚の札を全部覚えました。中学・高校・大学とクラブ等で友人とかるた遊びをしていましたが、22歳の時、東京白妙会に入会して、全日本かるた協会の会員になり、正式に競技かるたの手ほどきを受けました。翌 23歳の時、全国大会Ｂ級で優勝し、4段の資格を得ました。しかし、24歳の時カナダに留学し、27歳で帰国するまで、かるたは全くできませんでした。帰国後、再び選手として復帰し、31歳まで現役選手として各種の大会に参加し、全国大会で合わせて 5回優勝し、6段の資格を得ました。しかし、その頃から、私は物理学の研究に専念する道を選び、67歳になるまで、競技かるたの世界から休会しました。その間でも、平成 6年、広島県かるた協会設立に当たり会長を勤め、平成 9年には社団法人全日本かるた協会の設立とともに、その中国支部長 (平成 20年度まで) を勤めたりしたので、その功績として 8段の段位を頂きました。

私はその年の 3月、63歳で広島大学を定年退職し、引き続き 68歳まで近畿大学工学部に勤務しましたが、67歳の秋、広島の因島でねんりんぴっくのかるた大会が行われ、そこで久しぶりに現役時代一緒に技を競い合った仲間たちが皆元気に競技かるたをしているのを見て、それに刺激されて再び競技かるたの練習に取り組み始め、以後、1昨年まで、毎年ねんりんぴっくの大会には広島県代表選手として参加させてもらっています。その間の通算成績は、19勝３敗ですから、現役時代には程遠いものの、かなりカムバックできたと思っております。しかし、さすがに昨年あたりから、力も衰え、大会には出ておりません。反面、小倉百人一首そのものについては、興味が湧きだし、いろいろ本を読んだりして、日本古来の文化に触れる楽しみを味わっております。

ねんりんぴっくへの参加資格は、６０歳以上ですが、今年のねんりんぴっくかるた競技への参加者の中には、９０歳の方が二人おられたそうです。高齢者は高齢者なりの競技かるたの愉しみ方があります。私も、これからもできる限り長く競技かるたを自分なりに愉しみ、あわせて小倉百人一首を通じて、雅な平安文化に触れてゆきたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

（本稿は平成23年10月18日にTSS文化大学で行った講演の概要である。）